

題目：分配的正義と不確実性下の意思決定：情報探索プロセスの検討

氏名：荒井祐太

指導教官：亀田達也

望ましい富の分配をめぐる問題は人間にとって大きな課題の一つである。また、ギャンブルにおける選択問題も古くから人々の関心を集めてきた課題である。これまでこれら 2 つの問題について数多くの研究がなされてきたが、それぞれが別種の問題として扱われてきた。しかし、経済学では両問題には密接な関係があることが指摘されてきた (Vickrey, 1954; Harsanyi, 1953; Amiel & Cowell, 1999; Traub, Seidl, & Schmidt, 2009)。また、政治哲学者の Rawls も『正義論 (A Theory of Justice, 1971)』の中で分配とギャンブル (リスク) の状況を織り交ぜて議論している。これらの議論は主に規範的なものであるが、分配課題とギャンブル課題を比較した実験研究では、この 2 課題の選択には連動がみられることが報告されている (犬飼・黒阪・豊川・佐々木・亀田, 2010)。では、分配課題とギャンブル課題の連動はいかなる心的メカニズムによって生み出されているのであろうか。

こうした背景を受けて本研究では、分配およびギャンブル状況において選択に至るまでの過程がどのようなものであるか、そして 2 つの状況間で選択過程に関連・相違があるかを検討するために Mouselab を用いて実験室実験を行った。選択過程についてはそれぞれの課題において、3 つある金額のうち、最小額・中くらいの金額・最高額のどれを、どういう順番で探索しているのかに焦点を当てた。

実験の結果、分配状況でもギャンブル状況でも多くの人々は最小額にもっとも注意を払うという知見が得られた。ただし、分配状況に比べギャンブル状況では最小額を探索する回数がやや少なく、そしてこの相違は探索の初期段階に最も顕著に現れていた。このことから、2 つの状況における選択プロセスは完全に同じであるとは言えない。この相違が何によってもたらされているかについては、今後より詳しく検討する必要があるだろう。